

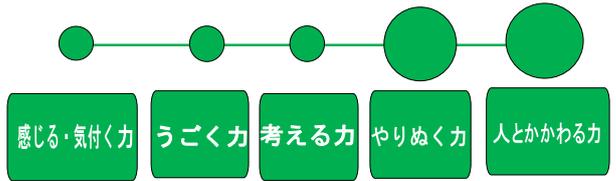


	感じる・ 気付く力	うごく力	考える力	やりぬく力	人とかが わる力
6 おんぶして…				●	●
7 あれ？影ないね	●		●		●
8 やった～！リンゴがとれたよ		●	●		●
9 赤ちゃんキュウリ お兄ちゃんキュウリ	●		●		●
10 でこぼこ橋って楽しいな！		●		●	●
11 積み木 ドキドキ		●	●	●	

## 事例6

1歳5か月  
(1歳クラス)

おんぶして・・・



### 【活動の様子】

保育室で、A児（1歳5か月）とB児（1歳9か月）が、人気のある電車のおもちゃの取り合いをしている。少しの間二人で引き合いをしていたが、B児が力尽くで電車を取り、遊び始める。

A児は泣きながら保育者のそばに来て、泣きじゃくる。保育者が、「Aくん、悔しかったね。あ、同じのがあるよ、これはどう？」と色違いの電車のおもちゃを渡そうとしたが、「やっ！」と首を振り、「あれっ！」とB児のおもちゃを指差す。A児は、気持ちが収まらないのか、保育者をたたきながら泣き続ける。

背中をトントンと優しくたたきながら、気持ちが収まるのを待っていると、だんだんと落ち着いてきたのか、泣き声が少しずつ小さくなっていく。保育者が、「Aくん、Bくんに『貸して』って言うってみる？」と話しかけると、泣き顔のまま首を横に振って、「オッパ イイ（おんぶして）」と保育者の背中に回って肩に手をかける。

A児は、体が強張り、まだしゃくりあげている。「Bくんに取りられちゃったね」、「あれで遊びたかったんだよね」とA児の思いを言葉にしながら、ゆっくりと保育室を回っていると、A児は保育者の肩に頭を乗せ、クタッと全身を密着させてくる。その体勢のまましばらくじっとしているが、もぞもぞと動き出して自分から降りようとするので、そっと降ろすと、A児は保育者を振り返ることなく、何事もなかったかのように、他のおもちゃで遊び始める。

### 【遊びの中で育まれている力】

- お互いに自分の気持ちを出し合う。【人とかわる力】

急いで積極的に関わると、子供の育ちや気付きを阻害する時もある。今回はあえて介入せずに見守ることにする。

- A児は、泣きじゃくったり、保育者をたたいたりしながら、自分の思いをぶつける。【人とかわる力】

身体的表現とともに自分の思いを出していると考え、しっかりと受け止める。A児に寄り添いながら、落ち着くまで待ってみよう。

- 保育者に身を委ねて甘えたいという自分の要求を、言葉で伝える。【人とかわる力】

身体的接触をしながら、A児の気持ちを言語化することによって、A児の思いを受け止めていることを伝える。

- 安心できる保育者の背中で、気持ちを落ち着かせ、気持ちを立て直す。【やりぬく力】

身体の変化（強張り→密着）は、心の変化（立ち直り具合）を表す。もぞもぞするということは、すっかり気持ちが立ち直ったと考えられる。

- 満足した後で、気持ちを立て直し、自分で遊び始める。【やりぬく力】



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【保育者との信頼関係】

A児は、「おもちゃを取られて悔しい気持ち」、「お気に入りのおもちゃで遊べない悲しい気持ち」を言語化できないまま泣きじゃくっている。その気持ちをありのままに受け入れてもらっていることを、おんぶしてもらうことによって改めて感じたことにより、A児は気持ちを立て直すことができた。

### 【子供の身体の変化を感じ取ることのできる保育者の感性】

子供の動き、表情などから、子供の気持ちを読み取ることのできる保育者の感性と、子供の望んだ方法で、心が安定するのを待つことのできる保育者の気持ちの余裕から、A児は高ぶった気持ちを落ち着かせることができた。

## 先生方へ…



この時期は、自我が芽生え自己主張として強く表れる時期です。自分の要求を、泣いたり駄々をこねたりして身体で表現し、要求を実現したいという自我を強く表します。

保育者はこの自我を受け止め、「嫌だったんだね」、「〇〇したかったんだ」と、子供の行為を共感的に意味付けたり、感情を言葉に置き換えたりすることで、子供は「分かってもらえた」と、受け止められる心地よさを感じます。

この満足感や安心感が、気持ちを和ませ、気持ちの切り換えにつながると考えます。子供は、自分の思いを通そうとするだけでなく、相手にも思いのあることが分かり、受け入れなければいけないという気持ちもありながら、それでも、自分の思いを強く出します。ここでしっかり甘え、自己主張し、受け止められる体験をすることが、好奇心旺盛な自我を育て、人間らしく生きる力となり、やがて、相手の思いを受け入れることができるようになると考えます。

保育者は、子供が予想外のことで驚いたり不安になったりした時も、信頼できる保育者のもとに戻れるよう、子供の安全基地でありたいものです。



## 事例 7

1歳8か月  
(1歳クラス)

### あれ？影ないね

#### 【活動の様子】

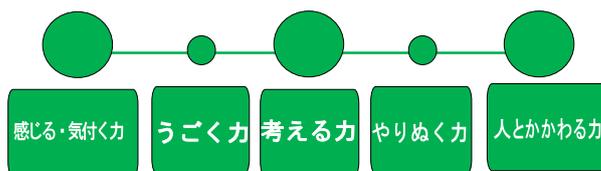
やわらかな朝の陽射しが保育室に降り注ぎ、子供たちが、風に揺れる窓際のカーテンの影を見つめている。手で押さえてみたり、影を捕まえようとしたりして、揺れるカーテンに隠れたり現れたりする影を、興味津々で見ている。

影がなくなると不思議そうに、「あれ？」とどこに行ったかを探したり、「ないね、ないね」と、なくなった影を確認しようとしたりする姿が見られる。

「Aちゃんの手の影も写っているよ」と声をかけると、A児（1歳8か月）は、不思議そうに手を動かし、自分の手の影が出来たことを発見し、確かめている。みんなも、それぞれ自分の手を動かし、手の影を追ってみる。

風が吹いて影が出来ると、顔を見合わせて笑い合い、「やったー」と喜んで、カーテンの影の動きをじっと見ている。カーテンの動きによって出来る影の動きが面白く、影が動くのを追うように手で押さえたり、腹ばいになって体で影を全部隠そうとしたりしている。

一人の子供が影を隠そうとすると、まねをして同じように手を当てたり、寝転んで影を隠したりしてはしゃぎ、みんなで影を隠そうとしている。「不思議だね。なくなったね」と、声をかけてみると、みんなで顔を見合わせ、笑い声がたくさん出てくる。みんな、影を隠すことに夢中になっている。



#### 【遊びの中で育まれている力】

- カーテンの揺れで出来る影を見付け、不思議さを感じる。【感じる・気付く力】

カーテンが風で揺れると畳にできる影が揺れ動くのが面白く、楽しい発見であると捉えている。大切に見守りたい。

- 一緒に影を探す楽しさを、みんなで味わう。【人とかわかる力】

保育者の発見を伝えて遊びの面白さを広げたい。

- 保育者の言葉で、自分の手の影が出来ていることに気づき、動かして確かめている。【考える力】

保育者も共に楽しむことで、「みんなと一緒に楽しい」という気持ちを育みたい。

- 影の不思議さを楽しむ。
- みんなで一つのことを楽しみ、心で対話をしながら喜びを共感する。【人とかわかる力】



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【ゆったりと遊べる空間と時間】

朝の日の光で出来た陽だまりの中で、揺れるカーテンの動きとともに、明るくなったり、暗くなったりする不思議さを子供たちが発見した。風とともに動く影の不思議さに好奇心を寄せて見入る中で、自分の手の影を発見したことが、さらなる不思議の発見につながった。

### 【子供の発見と気づきに寄り添う保育者の関わり】

カーテンの動きによって、影が動く面白さを発見した子供の姿を捉え、保育者が共に楽しむことで、遊びの面白さが増している。繰り返し十分に楽しむことのできる場を作ること、遊びに変化を持たせ遊びを広げることは、この時期の保育者の援助として大切にしたいことである。

### 【友だちとの共感】

友だちと一緒に遊ぶ楽しさ・温かさを十分に感じる中で、人と関わる喜びが育まれる。友だち同士の関わりの中で、互いに顔を見合わせ、気持ちが通じ、共感する喜びを感じることは、集団ならではの経験であり、この経験が「面白かった、またやりたい」というさらなる意欲を育てていく。

### 先生方へ…



興味をそそられるものや不思議なものを発見すると、子供は信頼する大人を振り返り、その頷きや表情を確かめます。そして、安心感を得ることができると、自ら活発に関わるようになります。ゆったりと遊べる空間と時間を大切に、子供の発見と気づきに寄り添う保育者の援助を丁寧にしていくことが、子供の意欲を促していきます。また、身近な人への興味が高まるこの時期には、保育者の食べるまねをしたり、友だちがすることを見て一緒にやりたがったりするなど、人との関わりが増してきます。

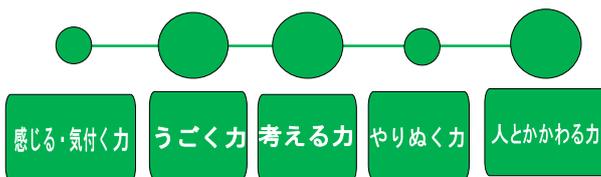
この事例では、カーテンの揺れで出来る影に驚き、繰り返し楽しく遊ぶという、保育者から見ると予想外の場面に出合い、感動の共有をしています。保育者が温かく見守る中、子供は友だちのまねをして影に手を当てたり、寝転んで影を隠したりするなど、新たな遊びを繰り返していきました。ここで大切なことは、子供同士の共感が、さらなる遊びの楽しさや「こうしてみよう」という工夫につながっていることです。

園・所ならではの経験できる、仲間と一緒にの体験を大切に、豊かな感性を育みたいものです。

## 事例 8

1歳8か月  
(1歳クラス)

### やった～！リンゴがとれたよ



#### 【活動の様子】

子供たちは、楽しくリンゴ狩りする絵本に興味を持ち、読み語りを聞いている。絵本のリンゴを指差したり、リンゴを取るまねをしたり、食べる真似をしたりして、一人一人が絵本の世界を楽しんでいる。

後日、絵本の読み語りを聞いた後、子供たちは気に入ったカゴを選び、腕に通したり肩にかけたり、持って引きずってみたりして、嬉しそうにしている。そして、「しゅっぱ一つ！」と部屋を出て、園舎内を散歩する。

部屋に戻りリンゴの木を見付けると、子供たちは「わぁ！」と歓声を上げて一目散に駆け寄る。

A児（2歳4か月）は、リンゴを次々とはカゴの中に入れていく。B児（2歳1か月）は、少し高いところに付けてあるリンゴをとろうとして、一所懸命手を伸ばしたり、背伸びしたり、ジャンプをしたりする。ようやくとれたリンゴを持ち、保育者の方を見て、「とれたよ！」とニコッと笑う。C児（1歳8か月）は、ジャンプしても届きそうにない高さにある上の方のリンゴをしばらく見上げていたが、「だっこ～！」と保育者に抱っこしてもらって自分でとって、得意げな顔で保育者を見て笑う。

思い思いの方法でリンゴをとることを楽しんだ頃、とることに満足し、B児とC児は並んで座り、「おいしいね～」と、食べるまねを始める。

そこで、「今度はくっつけてみて～」と声をかけ、保育者の持っていたリンゴを木にくっつけてみせる。子供たちは保育者ととったリンゴを交互に見比べたが、くっつける子はいない。

「じゃあ、みんなでいただきますをしよう！」と声をかけ、みんなで声を合わせて「いただきます！」をし、リンゴを食べるまねを楽しむ。

#### 【遊びの中で育まれている力】

- 好きな絵本を繰り返し読んでもらい、絵本の世界をイメージし、楽しむ。

想像の世界が、より膨らむように、リンゴ狩りのイメージをもとにした遊びにつなげていく。

子供一人一人のイメージが膨らみ、「ごっこ」「つもり」遊びが楽しめるように、一人一つずつカゴを用意しておく。

保育室に帰っても、イメージの世界を保てるよう、散歩の間に、保育室のリンゴの木に、ケント紙やフェルトで作ったリンゴをマジックテープで付けておく。

リンゴをとろうと体を動かしたり、どうやってとろうか考えたりすることができるように、色々な高さにリンゴを貼り付けてみよう。

- 全身を使って工夫しながらリンゴをとろうとする。【考える力】【うごく力】
- C児は、リンゴをとりたいという自分の意思を保育者に伝える。【人とかわる力】
- B児とC児は、友だちと共通のイメージをもとに、言葉のやりとりを楽しむ。【人とかわる力】

活動を続けることができるように、今度はリンゴをくっつけることを促してみよう。

子供たちが工夫してとった大切なものと考え、取ったリンゴを使って想像の世界を楽しむことができるように子供の思いを尊重しよう。



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【イメージの深まりと広がり】

保育者が、応答的な対応をしながら、繰り返し絵本の読み語りをするにより、子供たちそれぞれのリンゴ狩りのイメージが、深まったり広がったりした。

### 【発達段階に応じた環境構成】

1歳児にとって、保育者や子供同士で、イメージの共有はできても、遊具の共有は難しい。今回の活動では、自分自身のカゴと十分な数のリンゴ（子供の人数×3個以上）を用意していたことで、より遊びが深まった。

### 【自分でとりたいという気持ち】

自分でリンゴをとりたいという気持ちが、全身を使ってリンゴをとろうとする様々な動きを促すことにつながった。

### 【信頼を寄せる保育者との関わり】

保育者が困った時には助けてくれるといった安心感が心の支えとなり、保育者に抱っこしてもらえば、自分でリンゴをとることができることに、気付くことができた。



気に入った絵本を繰り返し読んでもらうことで、子供たちは絵本の世界に入り込みました。そして、保育者が用意したカゴを手にする事で、「リンゴをとりに行く」といった期待が膨らみ、活動意欲が高まっていきました。リンゴの木の出現により、その思いはますます高まり、とにかくたくさんとろうとする子供、高さへの挑戦をする子供と、リンゴをとることに夢中になっていきます。保育者はこの活動を継続させようとリンゴをくっ

つけることを促しますが、この関わりは功を奏しませんでした。しかし、子供の心の動きに応じた関わりをしたことで、遊びが豊かに広がっています。

この時期、身体全体のバランス感覚が発達してきた子供たちは、リンゴをとりたい一心で、腕の曲げ伸ばし、つま先立ち、膝の屈伸、ジャンプなどの動きに、全力で挑みます。また、自力では届かないと判断すると、しばらく考え、保育者に抱っこを要求をしています。このように保育者は、困った時にはいつでも頼れる存在でありたいものです。



## 事例9

1歳9か月  
(1歳クラス)

赤ちゃんキュウリ お兄ちゃんキュウリ

感じる・気付く力

うごく力

考える力

やりぬく力

人とかかわる力

### 【活動の様子】

1歳クラスの窓から見える場所に、菜園がある。年長の子供たちが、毎日、夏野菜に水やりをしたり、観察スケッチをしたり、野菜を収穫したりしているので、子供たちはそれをじっと見ている。

1歳クラスの子供たちは、年長児の中に兄や姉がいる子供も多く、世話をしている間、窓越しに年長児から声をかけてもらうなどの交流も多く、畑の作物に興味を示す子が増えてくる。

ある晴れた日の朝、窓越しに立ち、競うように畑を見ているので、いつもより早く菜園に行ってみることにする。今日は、ジャガイモやトマトの花を見付け、花の下に実を付け始めたキュウリも見付けている。小さなキュウリは小指ほどの大きさで、保育者が、「キュウリの赤ちゃんだね」と言うと、A児が、「赤ちゃん」とキュウリに声をかける。

しばらく見ていたA児は、他のキュウリを指差し「赤ちゃんない」と言う。そのキュウリは、最初に見付けたキュウリより、倍位大きい。「お兄ちゃんキュウリだね」と、保育者が応えると、ニッコリと笑い、他のキュウリも大きさを判別しながら、「赤ちゃん」、「お兄ちゃん」と、見付けては教えてくれる。保育者が「早く大きくなってね」と言うと、A児も「大きくなって」と、優しく声をかける。



数日後、大きくなったキュウリを年長児が収穫しているので、触らせてもらう。A児は、キュウリのトゲトゲに触れると、「痛いね」と、驚いたように言う。

A児は、今までキュウリは苦手な励ましても食べようとしなかったが、最近では少し口にしようとする姿が見られるようになっている。

その後、保護者から「トマトやキュウリの生野菜を食べようとしています」と嬉しいお知らせが届く。

### 【遊びの中で育まれている力】

- 窓から見える菜園の様子や、年長児が水やりやスケッチをしている様子を見るのが嬉しい。
- 年長児に声をかけてもらい、ますます興味・関心が高まる。【人とかかわる力】

年長児が菜園活動で水やりをしていることに興味・関心が高まっている。さらに広げていきたい。

- 畑に行った時、野菜の花に目が留まり、よく見ることで、キュウリの花に実が付いていることに気がつく。【感じる・気付く力】

最初の「赤ちゃん」より大きいので、「赤ちゃん」ではないと感じている。大きさを違いを識別している。大きなキュウリは「お兄ちゃん」と表現して、理解できるようにしてみよう。

- 他にも「赤ちゃんキュウリ」がないか探している。【考える力】
- キュウリが大きくなるのが分かる。【考える力】
- 小さいキュウリは、「キュウリの赤ちゃん」など、大小の違いに気付く。【感じる・気付く力】



- とれたての大きいキュウリに触れることで、トゲがあり、痛いと感じる。【感じる・気付く力】
- 興味津々になり、キュウリを食べてみようという気持ちになる。

- キュウリが食べられたことで、トマトなどの生野菜も食べてみようという気持ちになる。

キュウリの成長を、子供自身の成長と重ね合わせ、心動かしていきたい。

## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【身近な信頼できる人の存在と応答関係】

安心できる保育者との信頼関係を基盤に、自分の兄や姉、その友だちなど、親しみのある人がしていることに興味・関心を持つことで、活動の世界が広がり、次の活動への意欲につながっている。

### 【年齢に沿った言葉かけ】

言葉の意味（大きい・小さい）だけを伝えるのではなく、子供の生活からイメージできる言葉かけ、年齢発達に沿った言葉かけ（赤ちゃんキュウリ・お兄ちゃんキュウリ）をすることで大小を知り、大きさを判別しながら大小を考える力が育まれた。

### 【身近に感じられる環境】

キュウリ・トマトなどは、園や家庭の食事場面で、よく目にしている食べ物である。子供は、毎日行くことのできる菜園での発見や体験により、食への興味や関心を広げている。

先生方へ…



自然は不思議や発見の宝庫であり、日々の生活の中で身近な自然に触れる体験は、心を揺さぶるものです。また、歩行が安定し手先の動きも器用になり始めるこの時期、いいもの探し（探索活動）が活発になってきます。この旺盛な好奇心を育むものは、子供の感動体験に共感し、丁寧に受け止める保育者の援助にあります。

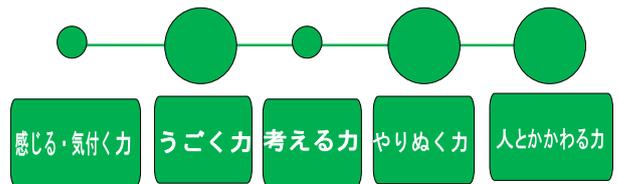
この事例では、子供の仕草と僅かな言葉で表す感動表現をしっかりと受け止め、「赤ちゃんキュウリ」というこの時期の子供に理解しやすい言葉に置き換えて共感を示すことで、言葉の育ちと大小の概念の獲得につながる援助がされています。1歳児なりの考える力の現れに喜びを感じている保育者の姿が見えるようです。この感動の共有が、美味しく食べることにつながり、食育の一環ともなっています。

自我の芽生えも出てくるこの時期、自然に触れる中で得られる感動体験は、子供の主体性を育む豊かな場として大切にしたいものです。

## 事例 10

1歳9か月  
(1歳クラス)

### でこぼこ橋って楽しいな!



#### 【活動の様子】

牛乳パックで手作りした登り降りができる階段状のおもちゃに、子供たちは片足ずつ乗せてみた後、安全を確かめるようにゆっくりと上体に乗せてみる。慎重なA児(1歳9か月)とB児(1歳11か月)は、2人とも棚の側面に手を当てながら、高低差のある段差を横歩きに一步一步踏みしめて確かめるように歩いている。一度最後まで渡り終えたことが大きな自信となり、保育者に笑みを見せながら、何度も繰り返し渡っている。

平均台や大型積み木等を置いて、「でこぼこ橋」を作ってみる。日常的に組み合わせを変えながら、部屋に配置する。日々変わる橋に戸惑う様子を見せるが、保育者に見守られながら、慎重に一步一步と確かめながら渡っていくことを繰り返す。そのことで、上手に全身を使い、バランスを取りながらしなやかに渡ることができるようになってきている。

橋、斜め板、平均台等の高低差はスリルがあり、ワクワクしている。最後まで渡った子供たちは、互いに顔を見ながら満面の笑顔になっている。何度も繰り返すことで、どんどんスピード感も増している。

保育者が、「すごいね。上手に渡れるね」と励ますと、「また、やりたい」という子供がいる。「次はどんな橋がいい?」と、子供たちと話し、また遊ぶことを約束する。



#### 【遊びの中で育まれている力】

- 初めての環境に不安な表情を見せていたが、保育者の顔を見て安心し、笑顔で過ごせるようになる。

組み合わせで高低差を作ることで、スリルを味わい、面白さが感じられよう、配置してみる。

- 「これならできる」と、側面に手を当て、自分の体を支えながら、立って歩く。【うごく力】
- 保育者に見守られながら、安心感の中で何度も繰り返し挑戦する。【うごく力】【やりぬく力】

保育者に認められることが喜びとなり、やってみたい意欲が増し、出来る自信につながっている。繰り返す姿を見守ろう。

- 何度も繰り返しながら遊び込む楽しさと満足感を、満面の笑顔で友だちと共感する。【人とかわる力】
- バランスをとりながら、だんだんとスピード感も増し、繰り返し渡れるようになった喜びを満喫している。【うごく力】【やりぬく力】

「また、やりたい」の言葉を受け、次回どんな橋にするか子供たちのアイディアを引き出した。みんなで一緒に楽しむことへの期待感を持ってほしい。



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【保育者との信頼感】

振り返ると優しいまなざしで微笑み返し、自分自身の存在を認めてくれる人的環境があることが、保育者との信頼関係を築き、子供にとって安心できる居場所となっている。この安心感が挑戦する意欲へとつながった。

### 【発達に合った環境構成と保育者の援助】

子供一人一人の発達に合った環境構成と保育者の援助により、楽しい遊びを通して体を動かすことを楽しみ、今持っている自らの力で繰り返す中で、全身の多様な動きを獲得している。

### 【一緒に遊ぶ、友だちの存在】

「面白そうだ」、「やってみたい」という子供の気持ちは、友だちの存在があればこそ起こってくる。豊かな人間関係の中で繰り返す遊びは、保育者の仲立ちによって楽しい遊びとなっていく。このことが、友だちと一緒に遊ぶと楽しいという経験となる。

先生方へ…



1歳後半頃より、左右の足運びやつま先とかかとの着地などの足取りがしっかりとした、直立二足歩行ができるようになります。歩く距離も長くなり、方向や速さの調整ができるようになります。転ぶことも少なくなってきました。この頃に、物を跨ぐ、斜面・段差の昇降をするなど、全身でバランスを取る遊びを経験することが大切です。

事例では、楽しみながらスリルも味わうことができるよう高低差を付けることや、不安を解消できるよう手をつけて歩ける柵を配置するなど、子供の内面に目を向け、一人一人の発達や個人差にも配慮した環境構成を工夫しています。安全にゆったりと遊べる空間の中で、保育者の優しいまなざしに支えられることにより、子供たちは一層意欲的に挑戦し、満足感や達成感を味わっています。こういった中で自己肯定感が育まれていくのです。

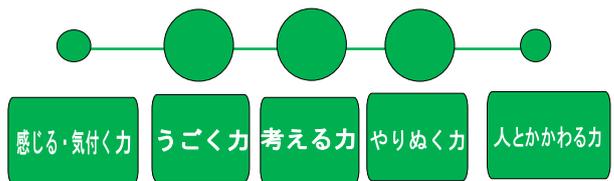
遊びを通して、身体を自由にコントロールし、状況に応じた行動ができるようになることで、「またやればできる」という気持ちを持ち、意欲的に粘り強くやり遂げていく力も育まれていきます。子供たちに共感関係も育ち始めているころですので、気持ちを共有する保育者の援助も大切です。



## 事例 11

2歳4か月  
(1歳クラス)

### 積み木 ドキドキ



#### 【活動の様子】

A児（2歳4か月）が遊戯室で全身を使って大型ソフト積み木を運んできては、積み上げている。他の子供が触ろうとすると「だめっ」と止めて、一生懸命積み上げている。

A児は、自分より高くなると、自分で踏み台用の積み木を持ってきて、それに上がって積み上げる。一つ積み上げる度に「見て！どう?!」と自信満々の表情で保育者を振り返る。「だんだん高くなってきたね」、「すごいね、Aちゃんよりも高くなったよ」などと保育者が声をかけると、「うん」と嬉しそうに頷く。

何段か積み重ねていくと、踏ん張って背伸びしても、積み木の踏み台を使っても、手の届かない高さになる。すると、A児は「抱っこして」と保育者に抱っこを求めてくる。抱っこされて置いてみたが、A児の足が当たってガラガラガラと音を立てて倒れてしまう。

「うわっ!」とびっくりするA児と保育者。崩れていく積み木を見た後に、驚いている保育者を見て、A児が大笑いし始める。つられて保育者も大笑いする。

保育者が「もう一回作ろっか!」と声をかけると、真面目な顔になり、また積み木を積み始める。頑張っただけ高くしては自分で積み木を倒し、驚いた顔をしている保育者を見て笑う、という遊びを繰り返し楽しんでいる。

#### 【遊びの中で育まれている力】

遊戯室内に、低年齢児でも持つことができる軽い大型ソフト積み木を置いておく。

- 運んだり持ち上げたりして、工夫しながら積み木を積み重ねる。【うごく力】【考える力】

子供が「できた」と振り返っていることに、丁寧に共感する。頑張っただけ積み重ねたことを、具体的に言葉をかけながら認め、さらなる意欲が高まってほしい。

- 積み木を利用してその上に上がったり、保育者に言葉で要求したりするなど、どうしたらより高く積み重ねられるか考える。【考える力】【やりぬく力】

A児の高く積み木たいという願いが実現できるように、要求に応えよう。

思いがけない出来事に驚くA児の思いに共感する。「緊張→驚き→緩和」と、A児の思いが変化している。

- 思いがけない出来事に驚く反面、保育者が驚いてくれること自体が楽しいことに気付く。

新しい楽しさが加わった遊びを、繰り返すように促してみよう。

- 新たな予測と期待を持って遊ぶ。



## この遊びの中での学びを支えたもの

### 【自分の思いを行動化できる身体の育ち】

体の動きの巧緻性が育っているからこそ、持つ・持ち上げる・積み重ねる・持ったまま踏み台の上に乗って積み重ねる・持ったまま抱っこされてさらに積み重ねようとするなど、自分の思いを行動に移すことができた。

### 【一人で考えて工夫することができる環境】

「積み木の素材（一人で持って積み重ねることのできるもの）」、「積み木の量」、「積み重ねられる空間」があったからこそ、A児が、自分でいろいろな手段を考え、実行することができた。

### 【保育者との共感的関係】

最初は、高く積み重ねることが遊びの楽しさだったが、音を立てて崩れていく積み木を見た時に、新しい遊びの楽しさを見付けたと考える。偶然でもあるが、A児の驚きに共感する保育者の存在があったことで、遊びの楽しさが増えていった。

## 先生方へ…



積み木は、様々な形に変化させながら、多様な遊びが繰り返し工夫できるものです。座位が安定し手を使って遊ぶ機会が増える頃から立方体を積み始め、並べる、高く積む、壊す、作ったものを見立てる、イメージしたものを作るなど、子供の発達に伴い遊び方が変化していきます。

A児は積み木を高く積み上げたいと願い、踏み台を用意したり保育者に助けを求めたりするなど、自分で考え工夫し、高く積みたい思いを達成しようとしています。保育者は、一つ積み上げる度に言葉を返し、積み木が崩れると顔を見て驚きを共有しています。この温かい応答による安心感や共感の蓄積が、思考する主体としての発達を促し、遊びの転換や広がりにつながったと考えます。

また、この遊びを繰り返し楽しむことから、大きな積み木を全身で持つ、運ぶ、積む、台の上で踏ん張りバランスをとって積むなどの動きが引き出され、身体的発達が促されています。この時期は、小さな積み木を高く積むより、大きな積み木を高く積む方が、難易度は低く、達成感も得られやすくなります。また、倒すことも楽しい時期です。落下しても安全性が高いなど、年齢に合った積み木の大きさや重さ、素材も、遊びの楽しさにつながったと考えます。